

近世磐城の駒付役

片 山 由 紀 子

一 奥羽街道踏瀬宿

(一) 奥羽街道と脇往還

五街道については諸説があり、名称もいろいろであるが、ごく普通には東海道・中仙道・甲州街道・日光道中・奥羽街道の五つをさすのが、妥当である。

江戸幕府は幕藩体制の基礎を固めるための一助として道路政策を重要視した。幕府にとっては有益な道路を掌中におさめる事によって直接・間接に経済発展の道を見出し、ひいては集権の実をあげるからであった。したがって京と江戸を結ぶ東海道にもっとも力をいれたのは当然であったが、ほど三代家光のころには徐々にではあるが江戸を中心として全国的に経済要路たる道路を開拓し直轄地として組入れていった。⁽¹⁾こゝで取上げる奥羽街道もその一つで、江戸と、東北地方および蝦夷を結ぶ要路として特に文化文政以後重要視されたのである。

奥羽街道は奥州道中あるいは奥州街道など、いろいろに呼ばれている。本稿で奥羽街道という名称を用いたのは、陸奥出羽両国に通じているという点からである。

奥羽街道はその宿駅の骨格がほゞ慶長年間⁽²⁾に出来あがったものといわれる。たとえば白坂宿は天正十八年(一五九〇)秀吉によって芦野から白川まで長距離であることからおかれたといわれるから、その以前に白川・芦野の両宿が存在したといえる。⁽³⁾このように徐々に整備されて奥羽街道の白沢から白川までの十宿は、⁽⁴⁾正保三年(一六六〇)の越堀宿を最後としてその布置を完成したことが知られる。⁽⁵⁾地方資料によってみて白川から約十里はなれた日出山村において、伝馬次の命ぜられたのが慶長十八年(一六四三)である。このようにして次第に奥羽街道全般に亘ってその宿駅ができていったものと思う。

こゝでは白沢より白川までを奥羽街道の本街道とし、それより以北陸奥の三厩までを脇往還として扱う。本街道は道中奉行の支配であり、脇往還は勘定奉行の支配下におかれていて、支配関係も違う。⁽⁶⁾このことはまた一般に本街道でみられるような本陣・脇本陣をそなえた宿が、白川以北、根田宿からは非常に少なくなるということ、および北進するにつれ、本陣があっても次第に簡略なものとなっていることからいえる。

本街道では各宿が平均二里ほどはなれているのに対し、脇往還では一里たらずのところもあり、本街道と呼ぶにはあまりにも近接して存在すること、各宿が比較的小宿であることが多いことなどで、

人馬賃錢之儀白川宿之振合ニ致度旨相願候得共白川宿は本街道ニ而道中方掛り右四ヶ宿(註、踏瀬宿他三ヶ宿のことをさす)は脇往還同様之場所ニ而白川宿之振合ニ相願候……………(文政九年)

の如く脇往還たることを述べた文書が散見する。

このような諸事例から判断して奥羽本街道は字都宮の次の白沢から白川まで十ヶ宿であり、白川の北隣の根田宿から北は脇往還とするのが妥当であろう。

(二) 踏瀬宿^{ふませじゆく}の成立と展開

踏瀬村は、白河より約三里北にはいった奥羽街道脇往還沿いの宿であるが一般的な農村の性格を有しており街村としてはあまり顕著な特色をもっているとはいえない。

踏瀬村の開発年代は明らかではない。しかしすでに建武年間にその所在が明らかにされる。⁽⁷⁾江戸初期には会津蒲生領の時もあったが、寛永年間に丹羽長重領となる以前のこととは判然としない。寛永以後、文化六年(一八五)幕領になるまで領主がしばしばかわっていたが、文化から幕末までは幕領としておもに埴代官所の支配下にあった。この地方は非常に支配関係が複雑で各大名の飛地などが錯綜していた。江戸末期には戸数三十戸人口約一三〇名前後をもつ村であり、時代による増減はあまりみられない。しかし慶安ころには三〇〇名をこえたというが、本多能登守忠明の折の慶安二年(一六五〇)の検地が非常に苛酷なものであったため一挙に七〇%近くの改出しがおこなわれ、それ以後生活苦のため人口が減少した。その上、天明・文政・天保年間などの度かさなる飢饉のために、さらに沈滞した。もとく地味もよくなく比較的田の方が良いというくらいである。村方構成ではだいたい十五石前後の石高をもったものがそのピークに位置する。各家屋は街道に対して幅の狭い奥行のある矩形の敷地を有し、街村の様相を呈している。⁽⁸⁾

宿役をつとめる場合、その小宿⁽⁹⁾たるが故に、小田川・大田川・大和久との四ヶ宿で合宿を行ない月のうち日を限って人馬を継立てゝいた。そしてその人馬継立ての件に関しては近在の助郷村々との争いもみられた。合宿はこの踏瀬村のみでなく、それ以外の宿にもみられ、踏瀬宿では月初め十日の継立て業務をとりおこなっていた。そして中畑宿より根田あるいは白川宿へと十日間を限って継立を行ない、宿財政の源としたので

ある。

踏瀬の庄屋・箭内名左門宅は村政の長たる庄屋と宿駅を司どる検断役、商業上の責任者たる問屋との三役を兼ねていた。⁽¹⁰⁾これらはすべて、十七世紀初期のころに任ぜられたもので、代々三役を兼ね、苗字帯刀を許されていた。

踏瀬村は、街村として商品流通圏内に入っていたということ以外にあまり独自の経済活動はない。特殊な産物はなく、だいたい自給自足的な生活であって三文酒屋などわずかな店があったことしか明らかではない。慶安以来の半石半永によって貨幣経済圏の渦中にあったということは云えても、客観的にみて特別目ざましい生産的な動きはない。しかしこの辺一帯から多量に鶏卵を江戸向けに出していた。

踏瀬村のみならず広く南奥の産物としてあげられるのは卵のほか、川俣地方からの絹糸、松川の煙草のほか紅花や種、油などの商品があり、この街道を通して消費地たる江戸へ運ばれたのである。

たとえば、延享年間(一七四一—四四)には福島に江戸の飛脚問屋京屋、嶋屋の出店がおかれた。⁽¹¹⁾福島市の東、伊達郡川俣地方は古くから絹織物の産地で、これを大都市の生産物と交流させることに、これらの問屋が注目し、通信業務のみを扱うばかりでなく、絹糸・綿類の荷物も扱ったのである。⁽¹²⁾

このように江戸末期になると交通量もゆたかになり商業発展の途がひらけ、街道もあらたに商品流通の面で利用されるようになった。このころは奥羽街道をはさんでその両側の関街道・原方道が物資輸送路として利用され、⁽¹³⁾宇都宮の北東の氏家宿から鬼怒川の板戸、あるいは阿久津河岸などで江戸に向け船積みするというルートがにぎわった。このように商品流通の盛況はこれら河岸の荷取扱量の増大、すなわち河岸の経営規

模拡大からうかう事ができる。しかし一面これら商品輸送路の盛行によって奥羽街道沿いの宿駅が衰微したともいえよう。

一方、地方市場を指向する商品もあった。それは馬とか米穀とかである。

都市市場向けのものは街道を通過するだけであり、生産地たる南奥から陸路あるいは水路ではこばれるものである。地方市場向けの商品はその市場に出廻って売買消化されるものであって、その有する意義が違ってくる。この時代に馬が大都市の市場に出されることはないが、地方市場においては馬は商品として出された。

この特産物として地方市場で扱われた馬が、南奥地方でどのように管理されていたかを、特にその在郷の管轄者たる駒付役という者の存在、および馬を売買する^{せり}糶市の事情からうかうことにする。

二 駒付役と駒糶市場

(一) 駒 付 役

奥羽街道沿いの宿々では人馬をもって継立てゝをり、牛車が使用されたあとはほとんどない。踏瀬村の宗門改帳や書上げなどを見ても、

牛車大八車等ナシ (文政五)

となっている。

平安時代には貴族の乗物として使われた牛車があり、戦国時代には牛力荷車の存在が明らかに見られるが、東国ではそれ以上の運搬機関とはなりえず、労力として人馬が用いられていたのである。⁽¹⁴⁾

三春駒の玩具などによって知られるように南奥地方は古来から著名な

馬の産地であった。福島県では県南に多く産したが良馬はやはり南部・仙台あたりにはおよばなかった。

南奥の馬産に関しては、古く八槻別当八槻幹良が長享元年(一二六七)に白川城主結城氏と共に馬百匹を朝廷と將軍足利義尚に献じたといわれる⁽¹⁵⁾し、延徳年間には白川から二十匹の馬を將軍足利義植に献じたという記録もある。江戸時代には七年に一度ずつ二才駒を幕府に献上していた⁽¹⁶⁾し、寛政ごろには白川の農民は大抵牝馬を飼っていて家ごとに二、三匹はいたといわれる⁽¹⁸⁾。明治三年にも、磐城の産馬の様子を記して

駒子出来候国は餘国に数少ク当国ニテハ国産之第一之義ニテ主領ニおいても重ク御取扱被下置

たとある。このように領主も産馬を保護奨励した。馬を飼育することを当地方では「タテル」というが、そのための代金として馬立金を貸与したり、優良な種駒を代官所が買入れておいて、それを牝馬をもつ百姓に貸して仔をうませるなど実際の政策上にも留意されていた。

このような助成金は村単位で村名主あてに交附されたので、借用証によればその宛名は各村の庄屋であり、利息は文化度以降十五両につきおよそ一分ずつであったが、その借用金額は個人によって差があった。このように馬立金は個人でかりた場合のほかに、宿立用の馬の爲の馬代金拝借は宿場単位において行なわれた。老馬・病馬などが多くて人馬継立に支障をきたしたような時に、この宿立用の馬代金拝借願が出されている。代官所の口入れによって個人が村宛に金をかしている場合も見受けられる。

このような産馬の保護奨励を村にあって直接司さる者が駒付役である。

駒付役の語源は明らかではない。駒のことを記すという意味の駒附か

あるいは附人などの語から推して、駒のことに関係した者という意味からくるものか判然としない。したがって駒付役は「コマツケヤク」と呼ぶか「コマツキヤク」と呼ぶかも明らかでない。

この駒付役は、村にあって売買・成育その他馬に関する村方の取引事務一切の長であって、村と代官所の間に位置するものである。後述する如く、一村だけに係わるものでなく、少なくとも馬のことに關しては、数ヶ村にわたって支配的立場に立っていたものである。

馬が成年になるのは満四才で、五、六才ごろが働きざかりである。馬が二才の時、稀には一才の時(当才駒)に、寄せ集めて馬の糶市をひらいて売買する。又二才とは限らずに相対売買あるいは袖裏法といって袖のうちに指で値をきめるのは馬市である。馬は春先ごろ生まれる。馬の糶市は、三・四月、秋は九・十・十一月ごろたてられた。この糶市をたてた際、特に重要な任を帯びていたのが駒付役であった。

駒付役は糶市の出現と共に存在する。会津若松領主蒲生飛彈守氏郷領の折の天正十八年(一五〇)踏瀬村その他近在の村々の馬糶市場として石川町で駒糶がひらかれるようになるのである。

駒付役の役割は、その領内中で出生した駒を集め、その中から領主の入用な馬を撰んで買上げたのち、その残りを売買する際、その間にあって運上金を取立てたり、毎年生まれる馬を調べて記入し、その翌春糶場に牽出させることである。

彼らは苗字帯刀を許されており、

駒付役相勤候もの共其郡中ニテ殊ニ由緒在之もの往古々相勤候儀ニ

テ (安政三)

と書上げているように、昔からのいわゆる格があった家が駒付役に任ぜられたと見る事ができよう。駒付役はその任を果すために、私領であつ

た当時は、廻村の際に使用する伝馬を一匹ずつ村々から提供されて懐胎駒や出生駒をあらため、三人扶持で十石の高を給されていた。しかし文化六年(一八〇九)幕領になると、それまで八万石で五人の駒付役であったのが、五万石で四人となり、それまで三人扶持だったのが、二人扶持になった。そのほか給高がなくなったかわりに、人足を一人ずつ召連れていくことになった。

駒付役は村々の出生馬や死馬・病馬・懐胎馬の実情を調べたりする他に、代官所より貸し与えられる種駒の手續きをしたり種駒拝借の爲の助成金三両を百姓がかりうける事の仲だちをした。種駒は代官所が糶市の際あがる運上金で良馬を買ひ上げておき、それを糶駒がある村々から願出のあった時に限って貸しつけるわけであるが、その貸付金は、幕末にいたって値上りはしたが、平均三両であった。それは貸付けた翌年から三ヶ年賦で取立て、返納する仕組になっていた。

宿用馬などの役馬を飼うための馬立金の貸借を扱い、糶市の売馬代金に課する分金を売主からとり、売値の一割五分の運上金をとった。そのうゑ駒付役は筆役と称して永二分をとりたてた。

江戸末期にはこの南奥一帯の馬糶市は所々でたてられた。近辺の糶市としては石川町のほか、白川、浅川、棚倉、埴、矢吹などいたるところでたてられた。各糶市にはそれ／＼駒付役が幾人かずつ所属していたのである。即ちある一定の区域内のある所に馬糶市がたてられてその区域内に駒付役がいたのである。であるからまず、糶市がたてられてその一半を管轄するものとして駒付役が任ぜられたと見るべきであろう。

この駒付役のような職掌をもったものは馬産の地はどこにでもいたようである。たとえば磐城の東側相馬郡でも駒付役あるいは駒立役という名称のものがいた。こゝでは郡代・勘定奉行などが他の事務とともに馬

政を兼掌しており、民間の馬産に関しては駒奉行もいた。⁽¹⁹⁾三春藩でも貞享二年(一六八五)に駒奉行・駒付役などが定められている。⁽²⁰⁾

最大の馬産の地として有名だった南部藩でも同様な者が存在している。南部藩では磐城の駒付役と少し性格の違ったものとして牛馬肝煎がいた。南部のように良馬を沢山産する場所になると、牛馬改役などという藩直属の役人がいる一方、実際に村の事に関与し、村内馬の売買・出産・死亡等の届出手続を司どり馬喰を監督するのが牛馬肝煎という者の役割であった。⁽²¹⁾彼らは村の裕福なものから選ばれ御礼銭というものを各馬主から一年に付き百文ずつとっていた。⁽²²⁾この牛馬肝煎は一村から一人の割に出ている所をみると、駒付役の方がより総括的な仕事をしていたと推される。逆にいえば南部ほどの産馬数には及ばなかったために駒付役が総括的に仕事をやりえたともとれるし、それだけ勢力を有していたとも云えるであろう。南部藩では、牛馬改役・牛馬肝煎などのほか、馬見役・牛見役などが存在したことが知られる。南部藩においてはその藩内に「牛馬所」を設けて牛馬帳簿を牛馬改役につくらせ、そのもとに、代官所ごとに牛馬役をおき、村ごとに牛馬肝煎をおくという仕組になっていた。⁽²³⁾そして春秋二度・牛馬改役は馬見役とともに出張して廻村し、馬籍と対照していた。このように、産馬数の多い南部藩では各役が分業的に組織だてられた仕事をおこない、磐城地方の駒付役のように村内の馬に関することをはじめ糶市のことまで大巾に職掌していたのではないと見ることが出来るよう。

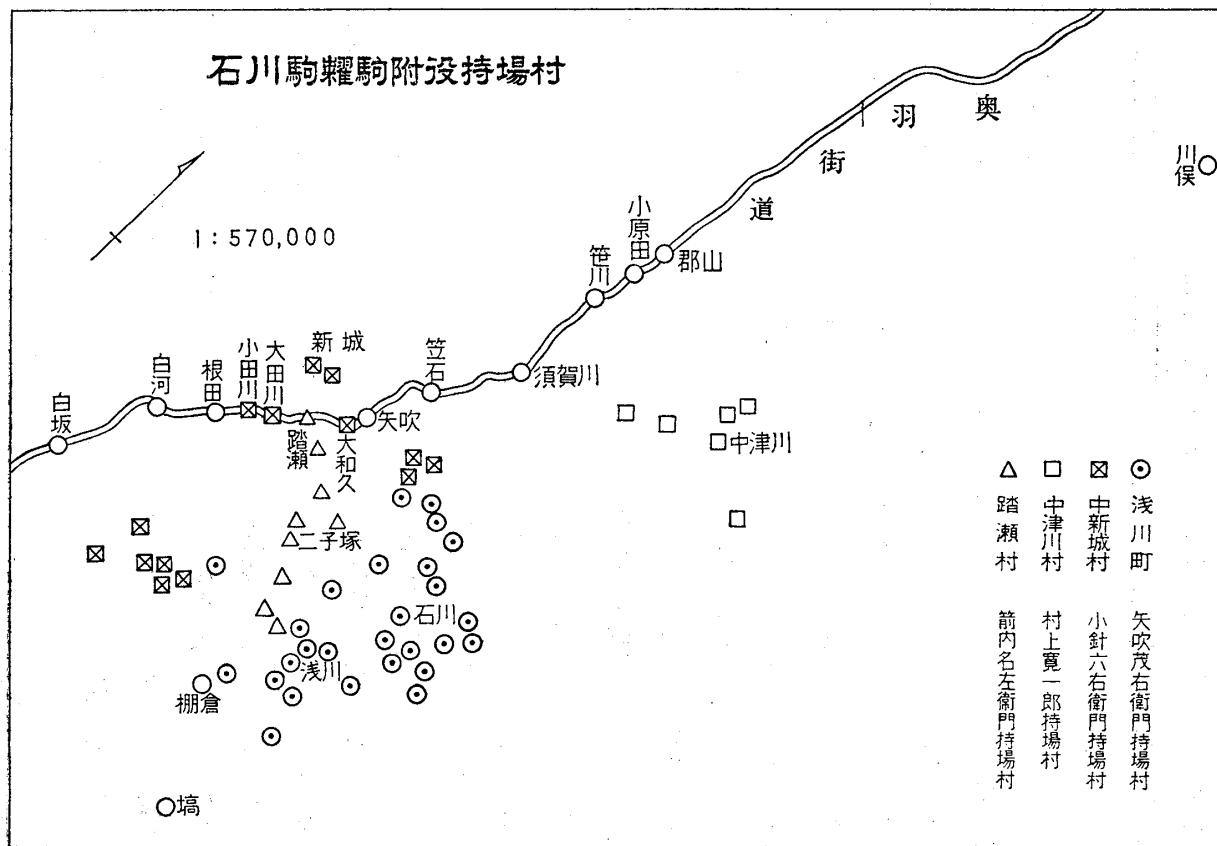
踏瀬が糶駒を出していたのは石川町であったが、石川町には四人の駒付役がいた。石川郡浅川町矢吹家・白川郡二子塚村小林家・白川郡新城村小針家・田村郡中津川村村上家である。このうち踏瀬村を実際に管

轄していたのは二子塚村の小林仲右エ門であった。駒付役は代々同じ家で引きつがれて来たが、天保からは小林家では仲右エ門が当主で駒付役をついでいた。距離的にみた場合、石川町より白川町の方が近く、しかも白川でも大々的な糶市があり、同じ街道筋であったにも拘らず、白川に出さなかったのは、白川が私領であったのに対し石川も含めて踏瀬村一帯が幕領に編入されていたからであろう。

石川駒糶市における四人の駒付役はそれ／＼数カ村ずつの所属の村を持ちその村に関する馬の事を扱うと同時に、糶市に於ける種々の仲介的役割を果たした。彼らは皆、家柄のあるもので、それ／＼の村の庄屋を勤めている。村々の庄屋は村落共同体の長であると同時に、代官所よりの通達を百姓に伝えたり貢租をとるなど行政官的性格を有している。そのような庄屋をそれ／＼兼ねている上に、少くとも馬に関する限りこれら四人の駒付役は、多い者で四十二ヶ村もの村に対し権力を有しており、それらの職務は代官所より任ぜられたものであった。その故に地役人的性格を有しており、駒関係以外にもさらに何らかの政治経済的支配権を握っていたのではないかと推察される。

嘉永ごろには矢吹茂右エ門は四十二カ村、小針六右エ門は二十カ村、小林仲右エ門は十五カ村、村上軍蔵は八カ村を管轄していた。それで石川町駒糶市には、八十五カ村からの糶駒が牽出された。

このあたりは有数の馬産地であり、日常生活に馬の占める比重は大きく、駒付役の任務や地位はきわめて大きかったのは当然であろう。大庄屋の存在が確然とは見られぬこの地方においてそれに匹敵するようなものであったらうと考えられる。庄屋をしている自分の村以外に、その駒付役としての管轄下の各村の村政に何らかの権力的な影響をおよぼしていたか否かを確かめる必要があろう。



踏瀬村は前述の二子塚村小林仲右エ門の管轄下であつたが、安政二年仲右エ門が

近来多病ニ罷成御役儀相勤兼実子良助義も病身ニ而難相勤ものニ付親類一同示談之上縁者白川郡踏瀬名左エ門義ハ近親之ものニ而年来検断庄屋相勤実躰ニ而筆算も仕候間後役之儀は右名左エ門江被仰付

………(安政二)

とある如く病弱を理由に駒付役を名左エ門に譲渡する一件があつた。

小林家は代々庄屋役をつとめ、寛政元年(一七九九)に駒付役を仰付けられた。しかし当主仲右エ門とその子良助ともに病弱の理由をもって駒付役は名左エ門が代行していた。名左エ門の妻が仲右エ門の姉であつたので義兄弟であるという姻戚関係から、内々で以前から駒付役を補佐していたのであるが、正式に委任されていなかったため糶市に出られないので、名左エ門にこの際一切委すという事を公表したのであつた。しかしこれは表向きの理由であつて、事實は嘉永七年(一八五五)に十年間無利息で金約五十兩を名左エ門からかりうけた。そしてその利息がわりに駒付役の扶持を名左エ門に渡し、もしこの金が十年以内に返済できぬ時は駒付役の任務を名左エ門に譲るという取極めをしている。困窮のために借金をし、その担保として駒付役という役務が付けられた。その翌年安政二年には借金の返済の見込みなく前出のような理由をたて、金百五十兩で名左エ門の手に駒付役がうつされたのである。彼が正式に駒付役に任ぜられたのは安政四年九月であつたが、代官から仲右エ門宛の申渡によれば

是迄下来候御扶持方を後役踏瀬村名左エ門江被下之以来苗字帯刀不相成候条可得其意候

とされた。

以上のように駒付役という役割は大なる勢力を有するのみならず、売買されたところからみても一種の「株」であったといえよう。

(二) 駒羅市場の存在

これまで駒付役を中心として産馬助長のためにどのような政策がとられて来たかを見たが、次に駒羅市を見よう。

踏瀬村ほか八十四カ村は前述のように石川町でひらかれる羅市に馬をだしていた。代官所から借りうけた種駒によって生まれた牝馬は飼主に与えられたが、牡馬は勝手に売買できず、二才になると羅に牽出すことになっており、その代金の三割あるいは二割を納めて、残を飼主のものとした。それで牝がうまれると喜んだともいう。そのほかにも、牡の二才駒が羅市で扱われたが、その値が売主の氣に合わぬものであれば主取といって売らなかった。

石川町の羅は春羅で、天正年間から始まったが、毎年三月二十四日の夕詰で翌二十五日から二十九日まで立っていた。前日の夕方ひいて来て事前に馬の良好を調べるのである。各村々はその羅市日がきめられていてその日に羅を行ない、翌日にまわす事はできなかった。出場頭数は安政年間には平均して六百頭前後であった。市は諸国から集まった馬喰で賑ったが石川町では高田町と下泉町とで隔年におこなわれた。

石川町羅附の四人の駒付役にはそれ／＼各村から八人の役馬喰が選出されていた。役馬喰の任務は春秋二度駒付役が廻村して駒を調べた後でそれを吟味して帳面に記したり、村役人の帳面で出生駒・懐胎駒等を調べたりする。羅の時には他所の馬喰に連絡し人を集めたり、初日から羅場に出て世話をし、羅の時は見込値を云ったりした。この手当として

一人につき金一分・銭一貫文が与えられていた。このように役馬喰は村方にあつて駒付役の下で運上を増すように働いたのである。

羅駒のうち一番良い馬は『御手前』一番悪い馬は『御羅御免』と称して運上をゆるされていた。一人で七匹羅駒を出した者には褒美も与えられた。

羅市は石川・浅川・埴・棚倉など方々でひらかれていた。がこの市場を繁栄させるためには他市場との均衡を保ちつゝ、その対策を講ぜねばならなかった。それで白川町春羅の出現による石川町羅の存立の問題が起った。

白川の馬市は寛永四年(三三) 丹羽長重領有の時から始まったといわれ、仲継市場の馬市として全国から馬喰が集まった。年貢町・桜町の二カ所で隔年に市がひらかれた。⁽²⁵⁾ この馬市は秋の市であったが、天明以後桜田鍛冶町で空地を利用して春の市も四月におこなわれるようになり、松平定信は基金として二百五十両を年賦で貸し下げた。⁽²⁶⁾ この春市にも仙台・南部などから馬喰が集まり、盛況だったが、やはり九月の秋の馬市が東北第一の馬市と称せられた。⁽²⁷⁾ この上更に春羅市がたてられた。

白川羅市は、白川領分大村外四四村の村々の馬によって構成されていた。白川町と石川町は五、六里の距離があつたが、弘化四年(一八四)代官寺西直次郎の支配の際に白川側は新しく春羅を行ないたい旨の願いを出した。しかしこの申し出はそれまでである石川の羅市に影響するのをおそれて許可されなかった。

ところが嘉永五年から再び春廻し羅を試みにしてみたいという願いが出された。その条件として、白川町羅の駒付役・藤内・常盤彦之助の名前で石川駒付役四人宛に出した書類には次の様に規定してあつた。新規春羅の時には馬数を二百匹ぐらいにする事、又もし村方で白川の羅の為

石川 糶 売 馬 金 銭 表
(但し二子塚駒付役管内のみ)

天保	7	34	両	3分	2朱	1貫	900文
	8	43		1		2	900
	9	67		3	2	2	900
	10	65		2	2	3	100
	11	38		2		2	000
	12	69				3	700
	13	81		2		3	100
	14	68				2	200
	15	91				4	200
弘化	2	94		3		4	200
	3	93				3	600
	4	100		1	2	3	300
嘉永	元	119			2	3	500
	2	88		3		1	700
	3	152		3	2	4	600
	4	147		1	2	4	100
	5	109		2	2	3	400
	6	112				4	500
	7	101		3	2	5	100
安政	2	85		1	2	3	700
	3	97		2		2	300
	4	63		1	2	3	500
	5	78		2		2	800
	6	94				3	800
	7	57		2		2	800
万延	元	66		1	2	3	100
文久	2	60		3		3	000

に難儀すると困るからそのための趣意金として白川町より百五十両を渡すから少しぐらい下値になってもこの金で補ってほしいこと、もしこの春糶でお互いにうまくいったならば継続して行ないたい事、白川側の望む三月五日では石川の駒値に支障があるならば市日を二月十五日にしてもよい。以上のような条件をたて、嘉永四年七月に仮儀定をしている。これは対談の上、嘉永六年から五年間に限つて二月二十日に春糶をたてることになった。しかしこの年期の内三年たった安政二年白川では二月二十日をやめて三月五日に変更したい旨を申出たのである。

白川町の糶市がたてられたため石川町糶のこうむった影響は次のようなものである。

白川糶のはじまった嘉永六年と、前年の五年の運上金の上にすでに違いが見られる。嘉永六年は四十両余、翌七年には五十両余の減少があらわれている。これまた二子塚小林仲右エ門の管轄内の村十五ヶ村の糶駒売馬金銭相調帳(表参照)による数字の変化をみても嘉永六年以降下降線をたどっている事で明らかである。白川糶がひらかれたため石川まで入

りこまなくなったため、馬糶市での取扱頭数が減少した結果であろう。このような運上金減少等の理由で、石川糶市の駒付役四人はここで春糶の日と白川春糶の日が接近していたならなおさら駒値段が下り、従つて運上金も上らなくなるといつて反対した。しかしこのあと五年間の年季明までその状態のまま継続したが、年季明後再び白川附の村々より引続いて十年延期を申出たのである。

一方、白川側では先に述べた石川側の意見に対し反論を加えて次の様に答えている。

不景気なのは石川だけではなく全体に見られる事で、これは天然相場が下落したためである。また白川は春糶をはじめたばかりであつて諸国の馬喰も

不事馴別而不繁昌之由ニ而御座候得共累年ニ至リ場所柄之儀往々ハ繁昌可仕奉存候

と思われた。そして石川の糶に支障はあるまいと見ているので、もし十年で長すぎるのならば五年だけでも良いと述べている。

しかし石川糶側にも言分はあった。はじめから白川糶が石川糶の値段に係属していく事はわかつていながら、近村のよしみで石川方も我慢してはいるがその利害はすでに黙視しがたい。最初に嘉永四・五年の石川の駒糶値段を目当にし、もしそれより下るようならすぐ取止めるという儀定をかわしておいたのである。しかし追々その影響をうけたために百姓達が駒を飼育するのに難儀であると訴え出たにもかかわらず、相場も下落したために「年季中差こらへ可申旨」を申し聞かせておい

たのである。このように二つの町の糶が両立しがたいことを訴え出たのである。

馬喰も年毎に石川町まで入りこむものが少くなり、交通の便の良い白川町へ集まることをもって駒値の減少の一理由とするのであるが、この駒売払高を表にあらわしてみる。

年	元	単位 高 払 売	
		高	払 売
嘉永	1	1591	
	2	1555	
	3	2015	
	4	1926	
	5	1722	
	6	1453	
安政	元	1083	
	2	1315	
	3	1241	
	4	1227	

これによって、嘉永元年から五年までの売払合高と、六年から安政四年までのそれとの差をみると、二四九〇両余も減少して、いてその内損は莫大なものであった。このように

石川町駒糶衰微仕候儀は眼前之儀ニ御座候間御利害之趣も不顧

継年季十年の許可は与えないで欲しいと石川糶の駒付役並びに小前百姓の連名で訴え出た。この結果、白川の春糶は、安政四年の願上げによれば白川より渡された趣意金百両のうち

半金丈之儀は何様ニも手段は当暮中迄ニ白川御領村々江差戻
ということをやめになった。

このように近在で同時期に糶市がたち、多くの点で新糶市の方が有利な条件と立場とをもった場合に、従来からある糶市が対抗するだけの勢力をもたずに衰えてしまう事をおそれ新規糶市の廃止を要求する声となつてあらわれるのは一般的な趨勢である。

白川糶との問題が片附いた後に、棚倉に糶市が立つことになって、また支障がおきた。

棚倉においては、毎年八月に駒糶市をたてていた所、牝馬のみの糶市を新しく三月中に行いたい旨の願出を文久二年（一八六二）に出した。しか

しこれは三月中であると石川町の糶と同月になって支障をきたす事、四月から五月にかけては浅川町においてやはり糶市がたつが、浅川と棚倉は、わずかに二里位しかはなれていないために浅川市場相場に支障をきたす故、新規春糶には反対している。

しかし棚倉と石川とは白川との場合にみられたような切実な利害関係はなかったらしく、棚倉牝馬糶に対する問題は駒付役自体、より軽い比重で扱っていたものと思われる。

糶市はその後幕末維新にかけて運営が渋滞し活況を呈さなくなった。馬の数も保護を加えられなかったために減少していく傾向を示した。そのため廃藩置県後、福島県は停滞した産馬業をおこすため、明治七年に岩瀬・安積・安達・西白河の四郡を合して、須賀川に産馬会社を設立することを援助した。さらに十一年には初めて全県下を統一して福島県産馬会社を組織し、須賀川に本社をおいたので、二十年代には総数十万頭をこえるようになった。そして軍用馬の育成などにあたったのであるが耕地開発のため採草地が減少して次第にその頭数を減じて来た⁽²⁹⁾。

一方かつてふるわなかった役肉用の牛の飼育が馬にくらべて簡単なため次第に普及していった結果、今大戦後には逆に、牛が馬の倍数に相当するほどになった⁽³⁰⁾。

しかしそのうち動力機械などの普及のため、家畜はあまり顧みられなくなり、現今では農家の酪農的経営方針に沿うように変貌されて来ている。

踏瀬宿はたしかに典型的宿駅というにはほど遠い村ではあったが、江戸初期より半石半永をいつけられていたほど、すでに貨幣経済の中に

あり時代が下るにつれて街道村としての踏瀬村が商品経済圏に巻込まれていった姿を商品流通の面からうかがい知ることができる。地方市場において売買された馬も、各村々の年々の出生駒数が少なくなかったことからその特産物として扱われる所以がわかる。けれどもこの馬産を駒付役の目を通してみるだけでなく、もっと広範に馬産に関する特別の保

護あるいは実情を、実地に農民の側の観点から知る事ができたならばと思われる。私はここでは駒付役という地役人的地位にあった箭内家の史料をもちいて、その立場から主に馬産地の特殊性をみたわけである。その故に駒付役が大庄屋的な存在ではなかったかという推量を試みに留まり、その実態を確実に捉えるには不十分であった。

註

- (1) 児王幸多 「近世宿駅制度の研究」 六一頁
- (2) 風間観静 「奥羽街道宿駅制の研究」 六一頁
- (3) 「白河風土記」上 六九頁
- (4) 白沢・氏家・喜連川・佐久山・太田原・鍋掛・堀越・芦野・白坂・白川
- (5) 渡辺一郎 「近世に於ける北関東の流通商品」 (歴史評論一九五一年一月号) 五六頁
- (6) 「諸例撰要」五
- (7) 「西白河郡村誌」所収 建武二年十月五日の文書
- (8) 安田初雄 「福島県新誌」 一五八頁
- (9) 小田川一四〇八石、大田川八三〇石、踏瀬六八九石、大和久八五九石
- (10) 検断役は寛永十二年(一三三三)、庄屋役は慶安四年(一六五二)
- (11) 大島延次郎 「日本の路」 一五九頁
- (12) 藤田五郎 「日本近代産業の生成」 二八一頁
- (13) 明暦四年(一六五八)に両街道が設置された。
- (14) 古島敏雄 「江戸時代の商品流通と交通」 一〇六頁
- (15) 「西白河郡村誌」
- (16) 「日本産業史大系」東北地方篇 一九三頁
- (17) 「西白河郡村誌」産馬の項
- (18) 「白河風土記」上 三頁
- (19) 「日本産業史大系」東北地方篇 一八九頁
- (20) 同 右 一九二頁
- (21) 同 右 一八〇頁
- (22) 西田彰三 「馬市考」(小樽商商創立二十五周年記念論文集) 七三〇頁
- (23) 「南部馬市」 七二九頁
- (24) 「白河風土記」上 四二頁
- (25) 同 右 三頁
- (26) 「日本産業史大系」東北地方篇 一七四頁
- (27) 28 「福島県産馬案内」
- (29) 安田初雄 「福島県新誌」 一一五頁
- (30) 同 右 一一七頁